

確立期標準日本語文に現れる従属節の数的特徴

一文語文との比較

福島 直恭

1. はじめに

1-1. 本研究の目的

本稿全体の目的は、標準日本語が書記言語（書き言葉）的な特徴を持つ言語変種であるということを、言語使用調査の結果を通してより明確することである。そして、この第1節では、次の2点について説明する。

①. なぜ、標準日本語が書記言語であることを明確にする必要があるのか

②. なぜ言語使用調査の結果を通してそのことを示すのか

それに先だって、次の1-2では、本稿にとっての重要概念である「口頭言語」と「書記言語」、および「標準日本語文」と「文語文」について、本稿ではそれをどう定義するのかということを説明する。

1-2. 用語の定義

1-2-1. 「口頭言語」と「書記言語」

一般的に、口頭言語とか話し言葉というと、音声を媒介とした言語表現全般のことをいうものと理解されていることが多い。しかし、本稿で口頭言語というのは、典型的には日常の口頭による言語表現の際に用いられるような言語変種のことである。その言語変種は、実際の実現としては、多くの場合音声化され口頭でやりとりされるが、やろうと思えば文字化することも可能であり、文字化されたからといって、その文体的特徴を維持する限り口頭言語でなくなるわけではない。つまり本稿でいう口頭言語とは、より厳密には「主として口頭によるコミュニケーション用の言語変種」とでもいうべきものである。

これに対して本稿で書記言語というのは「主として文字列による情報伝達用の言語変種」のことであり、典型的には、文字化して視覚的な媒体として受容されることを発信者が念頭に置いた場合に選択されることが多い言語変種のことである。こちらの方も、文字化されたものを読み上げた場合でも、あるいは文字化されることがなく音声のみで

実現されたとしても、そのような文体的特徴を有する限りあくまで書記言語ということになる。この口頭言語と書記言語の最も重要な違いは、それぞれの言語変種が用いられる際の、コミュニケーション上の条件の違いである。この条件の違いを簡潔にまとめると次のようになる。

- ・口頭言語は、発信者と受信者が同一空間にいて、多くの知識を共有している（共有していることを発信者が前提にしやすい）が書記言語は基本的にそうではない
- ・受信者の既有知識の量・質に関して、発信者が情報発信以前に把握している度合いが、口頭言語の方が大きい
- ・口頭言語は受信者の情報理解度、共感度などを、モニターしながら発信できるが、書記言語は基本的にそのようなことはできない

このコミュニケーション上の条件の違いが、口頭言語に依拠して発信された言語表現と、書記言語に依拠して発信された言語表現との間に、いろいろな側面でかなり大きな違いをもたらすことになる。口頭言語が使用されるような条件は、書記言語が使用されるような条件に比べて、受信者にとって有利な条件といえることができる。発信者からいえば、そういう有利な条件の受信者が理解できるような言語表現をすればいいのである。逆に、書記言語が使用されるような条件は、口頭言語が使用されるような条件に比べて、受信者にとって不利な条件といえることができる。発信者からいえば、そういう不利な条件の受信者でも理解できるような言語表現をする必要があるのである。不利な条件の受信者でも理解できるような言語表現というのは、具体的にいえば、

- A. 受信者の既有知識の少なさを補うために、より多くの情報を言語化する必要がある。
- B. 言語表現が分かりにくいものであった場合、受信者が自らの既有知識でそれを補って理解することがあまり期待できない。さらに受信者があまり理解できていないということを察知して言語表現を変更することも不可能である。よって、もともとの言語表現をより分かりやすいものにする必要がある。

ということである。この考え方からすると、書記言語の方が口頭言語より、多くの情報が言語化されているはずだし、よりわかりやすい、別の言い方をすると処理しやすい言語表現になっていることが予想される²。本稿での調査やその結果の分析は、こういう考え方の上に成り立っているものである。

1-2-2. 「標準日本語文」と「文語文」

本稿では、近代日本で起こった、いわゆる「言文一致運動」の結果として成立した、あるいは少なくとも成立したと日本語話者が思っている新しい言語変種のことを標準日

本語、または現代標準日本語と呼ぶことにする。そして、本稿でその標準日本語との比較対象とした訓読文系の言語変種のことを文語と呼ぶことにする。標準日本語で書かれたテキストが標準日本語文で、文語で書かれたテキストが文語文である。本稿では、その標準日本語文と文語文を、それぞれの文に含まれる従属節の数と種類という面から比較することになる。

一般的にいえば、文語という用語の対概念としてふさわしい用語は口語であろう。しかし、口語という用語は口頭言語と同じ意味を持つ用語としてとらえられる恐れがある。ところが、標準日本語は決して口頭言語そのものでも、口頭言語的な言語変種でもなく、むしろ書記言語としての特徴を多くもつ言語変種であるということが、実は本稿で最も強く主張したいことなのである。そういう本稿の趣旨からいって、いわゆる文語の対概念のことを口語ということは、決してできないのである。口語という用語を使わないなら、文語の方を他の言い方に換えるべきかもしれない。ただ、おそらく当時もっとも一般的な呼び方であった明治普通文という用語は、現代では一部の専門家しか知らないであろうし、訓読文とか訓読文系の言語変種といったのでは、近代よりはるか昔の文体をも含めてしまうことになる。よって今回はアンバランスな使い方であることには目をつぶって、標準日本語と文語という用語で統一することにした。

1-3. 書記言語としての標準日本語

標準日本語が書記言語であるということは、本稿以前にも、すでに複数の専門書や論文や辞書類で指摘されていることである³。しかし、それにもかかわらず、一般の日本語使用者にも、日本語の研究者にもその事実—標準日本語が書記言語であるという事実—が十分には理解されていないようにみえる。日本語母語話者をはじめとした実際の日本語使用者のほとんどと、かなりの数の日本語研究者は、標準日本語とは話しことばと書きことばのどちらか一方に所属するものではないと信じているように思われるのである。なぜ標準日本語が書記言語であるという事実が理解されていないのか、なぜ標準日本語は口頭言語と書記言語のどちらか一方に属することのないものとして理解されているのかというと、言文一致運動の結果として、それ以前は別物であった話しことばと書きことばは、近代以降の日本では一致したもの、つまりひとつのものとなったと考えられているからであろう。しかも、口頭言語と書記言語がひとつになったといっても、歴史的には口頭言語の方に統一されたという認識が優勢であるということさえできる。つまり、それまでは別々であった話しことばと書きことばは、近世になって、それまでの話しことばを書くときにも用いるようになった、言い換えれば話しことばの方に統一されたという認識である。近代以前の日本語を文語と呼び、それに対して近代に成立し

た標準日本語のことを口語と名付けるようなセンスは、口頭言語と書記言語が、言文一致の結果として口頭言語の方に統一されたという把握の仕方を反映したものに違いないからである。標準日本語のことを口語と命名したこと自体、標準日本語が話し言葉であるという誤った認識の表れであるのだが、こういう用語があるせいで、さらに誤った認識を再生産しているともいえるように思う。

本書の筆者にいわせれば、標準日本語が書記言語のひとつであるという事実を多くの日本語話者が理解していないことは、使用言語を基準とした言語使用者に対する偏見や差別や蔑視を肯定してしまうような意識、さらには言語の操作を通した使用者の価値観に対する操作について無自覚な態度を生む基盤になっているともいえるのである。また、言語研究の分野においては、もし言語研究者が、標準日本語が書記言語のひとつであるという事実をよく理解しないままで言語研究に臨んだ場合には、資料の位置づけ、用例の扱い、データの解釈などにおいて、さまざまな問題が生じることが明らかだと思う。例えば、次のようなことは、今までもあったであろうし、これからも起こりそうなことである。

- ・一方が過去のある時代の口頭言語、他方が現代標準日本語、このふたつの言語変種からそれぞれ得たデータを単純に比較して、それらの間の違いを言語変化によるものだとして結論づける。
- ・現代標準日本語の規則と、現代の東京地方の話し言葉の規則を混同して扱ったり、前者だけが正しい規則だという無反省な前提を出発点にする。

もし、Aという地域方言とBという地域方言からそれぞれ得たデータを、そういう違いがあるということを前提とせず比較して、両者の間に見いだされた違いを言語変化の問題として論じたり、両者から得られたデータをいっしょにして計算したりした研究があったら、誰でもその点を問題として指摘するはずである。ところが口頭言語と書記言語の違いに関しては、社会言語学とか方言研究の分野はともかく、語用論とか談話分析の分野でさえ、自覚的でないと思われる研究がいくつも存在する。標準日本語は書記言語であるという先行研究で指摘された事実が、まだ言語研究者の間にも浸透していないということであろう。本稿の筆者が、現代標準日本語が書記言語であることを改めて明確にする必要があると考えたのはこのような理由によるものである。

1-4. 言語使用調査の意義と着眼点

今述べたように、標準日本語が書記言語的な言語変種であるということは、言語研究者の間でも十分に認識されているとはいえない状態である。その理由のひとつは、そのこと－標準日本語が書記言語的な言語変種であること－を明確に認識した上で行われた

研究と、そうではない研究の間に、例えば1-3で例示したような重要な違いが生じることが理解されていないからであろう。さらにもうひとつの理由は、標準日本語は話し言葉（書記言語）であることを指摘した先行研究には、そのことを裏付けるような厳密な議論とか、客観的なデータ等が十分に示されているとはいえないからだと思われる。1-1で述べたように、本稿では実際の標準日本語文と文語文を対象とした調査を行って、その結果を通して標準日本語が書記言語であることをより明確にしようとするものであるが、それはこのような理由によるのである。

本稿の筆者は、福島（2005）において、平安時代の和文と訓読文を比較しながら、典型的な書記言語というべき訓読文の方が、口頭言語的性格の比較的強い和文より、ひとつの文の中に埋め込まれている従属節の数が少ないということを明らかにしている。なぜ、書記言語の方が従属節が少ないのかというと、1-2-1で述べたように、書記言語の方が、受け取った情報をより不利な条件下で解釈しなければならないので、発信者は、もともとの言語表現をより分かりやすいものにする必要があるからであろう。他の条件が同じならば、埋め込まれた従属節が少ないほど受信者の負担は少なくなると考えるということである。

さて、今回問題とする標準日本語が書記言語的な言語変種だとすると、標準日本語には他の書記言語と共通する特徴が多く含まれているはずであり、また、それに比べて口頭言語と共通する特徴は少ないはずである。そのように考えると、もし、標準日本語が、言文一致の結果として口頭言語と書記言語の中間的性格を持つものであるとか、両者の特徴を併せ持つ存在になったのだとしたら、従属節の出現数にもそれが反映されているはずである。つまり、典型的な書記言語である文語文よりは、ひとつの文あたりの従属節数が多くなることが予想される。そしてまた、今回の調査のように、確立期標準日本語を反映する資料を使用した場合、確立期の中でも、前半より後半の方が、口頭言語と書記言語の中間的性格がより定着、安定したものとなっているはずなので、その定着度、安定度の違いによって、前半の文章と後半の文章とでは従属節の出現数に関しても違いが出てきていると考えられる。反対に、言文一致などは実際には起こっておらず、標準日本語がはじめから文語とは別のもうひとつの書記言語だとしたら、従属節の出現数においても、同時期の文語文に比べて大差がつくほどその使用が多いということはないはずだし、また、確立期の後半になっても、前半よりさらに口頭言語と書記言語の中間的な性格が顕著になるということもないはずである。本稿は、このような着眼点から、確立期日本語⁴の言語資料として雑誌『太陽』に掲載された標準日本語文と文語文の記事を取りあげ、それぞれの記事に現れる従属節の数を調査し、比較してみようと思う。

雑誌『太陽』には、確立期の標準日本語で書かれた記事も、また、当時それと対立的

な文体であった文語文で書かれた記事も、ともに数多く採録されていて、両者の客観的な比較が可能である。さらに、『太陽』を資料として使用した場合、19世紀終盤から20世紀前半という「標準日本語」の確立期を経年的に追っていった、確立期の内部での変化を考察することも可能になると考えられる。

2. 調査資料と調査の概要

2-1. 調査資料について

本稿で使用した資料は、雑誌『太陽』に掲載された記事のうち、1-1で述べた目的に照らして選んだ、次の合計20本の論文である。

テキストとしては国立国語研究所による『太陽コーパス』内の本文を使用した。便宜上、各論文に次のような通し番号を付した。

<前期・標準日本語文>

- ①. 「国語研究に就きて」 上田万年 1895.1
- ②. 「家庭における第一義」 三浦通良 1895.1
- ③. 「歴史は科学に非ず」 田口卯吉 1895.11
- ④. 「戦後の海軍拡張の方針及程度」 渋沢栄一 1895.12
- ⑤. 「避擦国」 戸水寛人 1901.7

<後期・標準日本語文>

- ⑥. 「近代文明と発明」 阪谷芳郎 1925.1
- ⑦. 「現代の女性美」 斎藤佳三 1925.1
- ⑧. 「普選実施後の政党」 尾崎行雄 1925.4
- ⑨. 「蟻の戦争」 橋爪生 1925.7
- ⑩. 「作業時間短縮による能率の研究」 安井正太郎 1925.12

<前期・文語文>

- ⑪. 「日本帝国の任務」 中西牛郎 1895.1
- ⑫. 「勝戦後の教育」 千頭清臣 1895.1
- ⑬. 「倫理の改良」 久米邦武 1895.5
- ⑭. 「教育些談」 西村貞 1895.8
- ⑮. 「国民の元気」 吉村銀次郎 1895.11

<後期・文語文>

- ⑯. 「最近の波蘭独立問題」 大庭柯公 1917.1
- ⑰. 「時局の印象」 浅田江村 1917.8
- ⑱. 「物価調節の根本問題」 堀江帰一 1917.12

- ⑲.「東京市の高級市制」 坪谷善四郎 1917.13
⑳.「戦後の国際政局の変動」 牧野義智 1917.14

この20本の記事は、標準日本語文10本、文語文10本からなる。さらに、標準日本語文の10本は、この言語変種の確立期を前期と後期に分けて、それぞれから5本ずつ選んだものからなる。文語文の方も、それにあわせた時期から5本ずつ選んでいる。前期の記事は、『太陽コーパス』所収の中ではもっとも古い1895年のものから選ぶことを心がけた。しかし、当時の状況として、文語文の記事は豊富に存在するが、標準日本語文のものは多いとはいえない。そして、標準日本語文ではあっても、講演の筆録等で、後に講演者自身による、文章としての推敲が行われていないようなものや、小説等の文学的な文章は、他の調査対象と比較する資料としてはふさわしくないと判断したので、結局1895年の中からだけでは足りず、1901年からも選ばざるを得なかった(記事番号⑤)。これとは逆に、後期の資料は、『太陽コーパス』所収の中ではもっとも新しい1925年の文章から選ぶことが望ましいと思われるが、こちらの方は文語文が極端に少なく、あったとしてもジャンルが偏っていて比較する際に不適当と判断したので、これもやむを得ず1917年の記事から5編を選んだ。

これら20本の記事は、本稿でもたびたび言及する福島(2007)における、接続詞や接続助詞の調査対象とした資料とほぼかきなるものである。しかし、今回の調査の内容は、福島(2007)のものとは違って、個別の単語の種類ごとの出現数などには関わらないため、必ずしも各記事の全文を調査範囲とする必要性を感じなかった。それよりも記事ごとの分量があまり偏らないことを考慮して、福島(2007)の調査対象とした資料から3本を外し、かわりに3本を新たに加えた。また、同様の理由によって、いくつかの記事の後半部分をカットしたものがある。それでも量的な偏りがある程度残ってしまったのは、今述べたように、特に前期の標準日本語文と、後期の文語文の記事が少なく、あまり自由に選ぶことができなかったからである。

2-2. 調査の概要

2-2-1. 従属節の平均出現数

本稿は、2-1で挙げた20の記事について、その記事に含まれる従属節が、ひとつの文あたり平均いくつくらい出現するものなのかを記事別に調査した。つまり、あるひとつの記事に現れる従属節の総数を、その記事に含まれる文の総数で割ったものがそれにあたる。

$$\text{記事別の従属節平均出現数} = \frac{\text{その記事の従属節の総数}}{\text{その記事の文の総数}}$$

2-2-2. 用例とする対象の限定

本稿で従属節として分析対象としたものは、基本的に連用的な節のみである。従って連体修飾節はカウントしていない。ただし、次の(1)の< >内のような例は、ひとつの連用修飾節として数えた。

- (1) 盖し戦勝の結果として<我日本帝國は此より一躍して／以て歐米の諸強國と共に比肩並轡して／世界の競争場裏に馳驅する>ものとすれば／…

(戦勝後の教育・記事番号⑫)

この文(文といっても後半は省略してあるが)には、<我日本帝國は～世界の競争場裏に馳驅する>という長い連体修飾節があり、「もの」を連体修飾している。その長い連体修飾節の中に、「～一躍して」「～比肩並轡して」というふたつの連用修飾節が埋め込まれているとみるのが適当であろう。全体としてみれば「～一躍して」も「～比肩並轡して」も連体修飾節一部になるが、本稿ではこういうものも連用修飾節として扱ったということである。

また、連用的な節の中でも、引用を示す接続助詞の「と」によって導かれる従属節は、ひとつの文相当の振る舞いをするものとして、福島(2007)での調査と同様に従属節には含めないことにした。もちろん例えば「外を見ると雨が降っていた」の「外を見ると」のような例は従属節として扱った。そのほか、「あわせて～」、「不幸にして～」、「畢竟すれば～」、「この時にあたりて～」などのような例は、用言+接続助詞「て」ではなく、下線部全体で接続詞相当と見なして、従属節には含めなかった。

2-1で挙げた20の記事には、それぞれの本文の前に、その論文の筆者の紹介文が載せられている場合があるが、その紹介文は調査範囲から除外した。

また、記事本文中に、他文献からの直接引用部分がある場合、その部分も調査範囲から除いた。例えば、

- (2) 昨年の労働會議の際に、私は外國の新聞紙上で『職工の勤務時間以外の餘りの時間を如何に利用する事が彼等の精神並びに身體の健全を保つて、長く能率的に働き得る方法か』といふ問題を見出した。

(「作業時間短縮による能率の研究」・記事番号⑩)

という文であれば、引用部分(『 』内)からは用例の採取を行っていないということであり、この例は、

(3) 昨年の労働會議の際に、私は外國の新聞紙上で★といふ問題を見出した。

という従属節(連用従属節)を含まない単文として処理したということである。また、1文のほとんどが引用から成り立っているような文は、その文自体を調査範囲から削除した。例えば次の(4)のような文がそれにあたる。

(4) 市長官選論者は曰く、『東京市長の位置低きを不穩當と爲せばこそ、都制案に依て、都長官を勅任と爲し、府縣知事の上席に置かんと欲するに、市民は常に之に反對せしにあらずや、畢竟市長の待遇低きは、市民の自ら求むる所なり』と。
(「東京市の高級市制」・記事番号⑨)

つまり、こういう例は、(2)のような文と違って、引用部分だけではなく、出現した文としてカウントすることさえしなかったということである。

①～⑳それぞれの記事における「文」の認定は、その記事に用いられている句点をあてにせずに、本稿の筆者が行った。雑誌『太陽』においては、現代表記の句点、読点と形の上では同様の二種の区切り符号が用いられているが、現代表記のように基本的には必ず文末は「。」で示されるとか、「。」は文末のみに使用されるという統一的な原則があるわけではない(詳しくは田中(2005)参照)。この点は福島(2007)と同じ処理の仕方である。ただし今回は、他と比べて著しく分量の多い論文は、後ろの部分をカットしていることがあるし、また連体修飾節中の連用的従属節の扱いや、直接引用部分を含む文の取り扱いの違いなどがあって、福島(2007)と同じ記事を使っている、文の総数が少し違っている場合があることをあらかじめ断っておく。

3. 調査結果

3-1. 記事別の従属節平均出現数

2-2-1で示した式にあてはめて、平均するとひとつの文あたりいくつの連用的従属節を含んでいるかを20の記事別に算出した結果が次の<表1>である。

<表1>の中の縦軸の①～⑳というのは、2-1で列挙した記事につけた番号である。また、従属節数とは、それぞれの記事の中にあった従属節をすべて足した数であり、文数というのは、それぞれの記事に含まれる文の総数である。「1文あたり」の欄の数値は、その記事の従属節の総数を文の総数で割って、小数点第3位を四捨五入して得られたもので、その記事に含まれる文ひとつあたり、平均するといくつの従属節が埋め込まれているかを示す数値である。

<表 1> 記事別の従属節平均出現数

論 文	従属節数	文 数	1 文あたり
①	131	122	1.07
②	72	58	1.24
③	129	128	1.01
④	166	141	1.18
⑤	120	104	1.15
⑥	126	125	1.01
⑦	73	45	1.62
⑧	141	121	1.17
⑨	107	91	1.18
⑩	117	106	1.11
⑪	105	101	1.04
⑫	148	117	1.26
⑬	203	156	1.3
⑭	124	98	1.27
⑮	235	179	1.31
⑯	81	66	1.23
⑰	136	117	1.17
⑱	161	94	1.71
⑲	129	86	1.5
⑳	148	99	1.49

例えば文献番号①とは上田万年「国語研究に就きて」(1895.1)のことである。この記事には合計131の連用的な従属節があり、この記事に含まれる文の総数が122なので、 $131 \div 122 = 1.07$ 。つまりこの記事では、ひとつの文あたり約1.07個の従属節が埋め込まれていたということがわかる。20の記事の中で、この数値が最も高かったものは1.71、最も低かったのが1.01であった。

3 - 2. 標準日本語文と文語文の比較

3 - 2 - 1. 確立期前期と後期の比較

前の3 - 1では、記事別の平均従属節数を示した。ここでは、標準日本語文と文語文

確立期標準日本語文に現れる従属節の数的特徴
—文語文との比較—

というふたつの言語変種の間に違いが現れるかどうか、現れるとしたらそれはどう解釈すべき違いなのかという点について考察する。まず、記事別の〈表1〉を、標準日本語文と文語文別にまとめたものが次の〈表2〉である。

〈表2〉標準日本語文と文語文の従属節数

	従属節数	文数	1文あたり
標準日本語	1182	1041	1.14
文語	1470	1113	1.32

10本の標準日本語の記事（記事番号①～⑩）に現れた従属節の総数が1182個、文の総数は1041なので、標準日本語文の場合は、1文あたり1.14個の従属節が埋め込まれているということになる。文語について同じ計算をすると、1.32という数値になる。

また、標準日本語文と文語文の区分はそのままにして、さらに確立期の中でも比較的早い時期（記事番号①～⑤および⑪～⑮・これを前期とする）と遅い時期（記事番号⑥～⑩および⑯～⑳・これを後期とする）という、時期による違いという観点も含めたまとめ方をしたものが次の〈表3〉である。

〈表3〉前期と後期の従属節数の違い

		従属節数	文数	1文あたり
標準日本語	前期	618	553	1.12
	後期	564	488	1.16
文語	前期	815	655	1.25
	後期	651	462	1.42

この<表3>から分かるように、標準日本語文は、1895年の記事と1925年の記事の間で大きな違いは見られない。1895年に書かれた100の文からなる文章には、その中に従属節が112個含まれているのに対して、1925年に書かれた100の文からなる文章だと、その数が116個になるという程度の違いでは、それらの文章を読み比べた場合、いかなる日本語使用者もその点の違いを実感することができないはずである。文語文の方の前期と後期の違いもさほど大きなものとはいえないであろう。標準日本語文にしる文語文にしる、基本的に時期による違いは見いだせないと考えるのが妥当のように思う。特に本稿にとって重要なのは標準日本語文の方であり、少なくともこちらは、確立期においては一貫して、だいたいひとつの文にはひとつの従属節という程度の出現数といえよう。

3-2-2. 標準日本語文と文語文で違いがあるか

本稿の考察の目的は、標準日本語文は文語文と同じように書記言語的特徴を備えた存在なのであり、口頭言語的な言語変種ではないということをデータを基にして明らかにすることである。よってここでの問題は、<表1>～<表3>によって示されている事実は、この趣旨に添ったデータとして解釈できるものなのかどうかという点である。調査の結果、少なくとも標準日本語文の場合は、確立期前期と後期の間の違いはないことがわかったので、ここでは<表2>に戻って検討を行うことにする

まず、文語文が書記言語であることは間違いのないところで、これは本稿にとっての前提である。そうするとその文語文の数値1.32より0.18程度低い1.14という数値をどう解釈すべきかということを考えなければならない。考える内容をより具体的にいえば、この程度の違いは意味のある違いというべきなのかどうかということと、意味のある違いだとしたら、文語文より低いということはどういう意味なのかということである。この点に関して参考になると思われるのは、本稿の筆者が福島(2005)で扱った、平安時代の和文と訓読文についての同様の調査の結果である。この場合、まず訓読文が書記言語であることは明らかな事実であって考察に際しての前提となっている。問題は和文の方で、こちらは例えば『源氏物語』とか『枕草子』などの散文の平安仮名文学で用いられた文体を指すものである。当然書かれたテキストとして残っているので書記言語のように考えがちであるが、実は書かれたものではありながら口頭言語的な文体であると主張する先行研究が、文学の分野にも語学の分野にも複数存在するのである⁵。これら先行研究での主張は、親しく和文に接した経験から得られた感覚をその基盤にしたものといえる。これに対して福島(2005)では、埋め込まれた従属節の量という観点から、実際の調査を通して得られたデータを基に同様の主張をしようとしたものである。

福島(2005)での調査結果によると、

和文の3資料では、平均して1文内に1.8個の従属節が埋め込まれているのに対して、訓読文では平均して半分の0.9個しかないということが分かる。また、ひとつ以上の従属節を有する複文と、従属節を持たない単文の比率という点でも、和文と訓読文ではかなり大きな数的違いが見られる。

と述べ、次のように結論づけている。

1文あたりの平均的従属節という観点から見ると、標準日本語文は文語文と同程度かそれ以上に書記言語的特徴を示している。

たくさんの従属節が埋め込まれた長い文は、理解に際して受信者により大きな負担をかけることになるので、受信者にとってより有利な条件が揃っている場合にしか現れにくい。そして、口頭言語とは、受信者にとってより有利な条件が揃っている場におけるコミュニケーションの際に依拠される言語変種なので、1文あたりの従属節数がより多くみられることになるはずである。逆に受信者にとって不利な条件の場合に発信される言語表現には、あまりたくさんの従属節が埋め込まれていない文が多く現れるはずであり、書記言語的であるということは、まさにそういう不利な条件下にふさわしい言語表現ということなので、口頭言語的表現に比べて、ひとつの文あたりの従属節数が少なくなるはずである。上に引用した福島(2005)の結論は、こういう考え方に導き出されたものである。

さて、<表2>にみられる数値を、福島(2005)での調査結果と比較してみる。本稿の調査で得られた標準日本語文と文語文との間の数値の差は、福島(2005)での調査で得られた和文と訓読文の差よりかなり小さいものであるということが出来る。すなわち、和文と訓読文の1文あたりの平均的従属節数の差は0.9であるのに対して、本稿の調査結果では標準日本語文と文語文の違いが0.18となっているからである。福島(2005)では、そこでの調査結果の数値を基にして、和文と訓読文の従属節の量的な違いを次のようなイメージで表現している。

平均的な訓読文は、主節ひとつに対して従属節がひとつあるかないかというもののに対して、和文では主節に埋め込まれた従属節の中にもうひとつ従属節が埋め込まれているというパターンが平均的であるということである。

しかし、今回の調査結果によると、標準日本語文と文語文との違いをこのようなイメージで語ることはできないであろう。標準日本語文の数値と文語文の数値の差は、誤差の範囲であるといって簡単に片付けることはできないかもしれないが、少なくともこの違いが、理解にあたっての困難さを大きく左右するほどのものとは思えない。その点の本稿にとって重要なのである。本稿の筆者は、従属節がどのくらい埋め込まれているかという観点からいうと、標準日本語文は文語文と同じようにその数が少ない言語変種

だと考えている。つまり、そういう観点からいうと、標準日本語文は文語文と同じように書記言語的な性格を持つ言語変種であるといえると考えている。何らかの理由で従属節の平均的出現数が違ったとしても、その量的な違いが理解の難易度に関係しない程度であれば、本稿の主張は支持されるということになるからである。

念のために付け加えておくが、もし仮に標準日本語文と文語文の間にみられる数値の差が、そのまま理解にあたっての難易度につながるものだとしても、それは本稿の主張にとっての問題とはならない。なぜなら、標準日本語文は文語文より平均的な従属節の出現数が少ないのであり、少ないということは、他の条件が同じならば、その文はより処理しやすいということ、つまり標準日本語文は文語文よりさらに書記言語的であるということにしかないからである。

4. まとめと今後の方向

今回行った調査とその考察によって、標準日本語は、少なくとも1文あたりに埋め込まれた従属節の数という観点からみると、文語文と同じく書記言語的な性格の強い言語変種であるということが明らかになったのではないと思う。この結果は、本稿と同じ目的のもとに、同じ資料を使って行われた福島（2007）での、接続詞や接続助詞に焦点をあてた調査研究とあわせることによって、その主張の妥当性をより高いものにすることができると思う。

本稿も福島（2007）も、標準日本語が書記言語的言語変種であることを明らかにすることを目的としたものであるが、本稿の筆者の最大の関心は、実はそのところにあるわけではない。標準日本語が書記言語的言語変種であるとして、そのことが日本語や日本の社会や日本語母語話者にどのような影響を与えることなのかという点を明らかにすることこそ、現在の本稿の筆者が重視している課題である。紙幅の関係上、その問題についてここで説明することは全くできなが、その問題については、別の稿で論ずる予定である。

注

注1 本稿の筆者は、「より多くの情報が言語化されている」ような言語表現のことを「言語内情報完結度の高い言語表現」と呼んでいる。書記言語は口頭言語より言語内情報完結度の高い言語変種といえる。福島（2007）では、接続詞や接続助詞の使用に関する調査を通して、標準日本語の言語内情報完結度の高さを指摘したが、それは本稿と同じ目的－標準日本語が書記言語的言語変種であることを明らかにすること－から行ったものである。

注2 ここで「よりわかりやすい、より処理しやすい言語表現」といっているのは、どのような条件下

確立期標準日本語文に現れる従属節の数的特徴
—文語文との比較—

においてもわかりやすいとか処理しやすいという意味ではない。あくまで、書記言語による情報伝達が行われる典型的な条件下にあるような受信者にとっては、よりわかりやすい、より処理しやすい言語表現という意味である。よって、その言語表現をそのまま口頭言語によるコミュニケーションが行われる典型的な条件下におかれた理解者に処理させた場合は、必ずしも最適な言語表現とはいえなくなると予想される。情報処理を行う受信者がおかれている個別の条件を捨象して、どのような条件下においても一番わかりやすいとか処理しやすい言語表現はいかなるものかということを問うことは不可能だと思われる。

- 注3 例えば、『日本語の歴史・第6巻』（1965 亀井孝他編 平凡社）では、
「創造と思考のための新たなことば」と表現している。また、『雑誌「太陽」による確立期現代語の研究』所収の諸論文も、一貫してこの言語変種を「書き言葉」と位置づける立場から書かれている。
- 注4 ここで、「標準日本語の確立期」というのは、田中（2005）に従ったものである。具体的な時期としては19世紀後半から20世紀初期を指すものである。
- 注5 山口（1980）、竹内（1986）、神谷（1993）、玉上（2003）、小松（2003）など

参考・引用文献

- 神谷かをる（1993）『仮名文学の文章史的研究』和泉書院
- 亀井 孝（1989）「日本語（歴史）」『言語学大辞典第2巻世界言語編（中）』三省堂
- 川田順造（2004）『コトバ・言葉・ことば—文字と日本語を考える』青土社
- 小松英雄（2003）『仮名文の構文原理—増補版—』笠間書院
- 竹内美智子（1986）『平安時代和文の研究』明治書院
- 田中牧郎（2005）「言語資料としての雑誌『太陽』の考察と『太陽コーパス』の設計」
『雑誌「太陽」による確立期現代語の研究』国立国語研究所編 博文館新社
- 玉上琢彌（2003）『源氏物語音読論』岩波現代文庫：学術115
- 福島直恭（2005）「平安和文における接続詞と接続助詞」『学習院女子大学紀要6』
- 福島直恭（2007）「確立期標準日本語の従属節の現れ方に関する一考察」
『学習院女子大学紀要8』
- 山口堯二（1980）『古代接続法の研究』和泉書院
- J.W.オング（1991）『声の文化と文字の文化』桜井直文他訳 藤原書店

（本学教授）